人と学説

アダム・スミス

――生涯と業績――（一）

上野　格

一、はじめに

アダム・スミス（一七二三―九〇）が十年余の骨身を削る苦心の末ようやく『国富論』[1]を完成し、出版したのは一七七六年三月九日のことであった。アダム・スミス五二才。出版前から評判が高く、初版一千部は半年もたたぬうちに売切れたという。同じ年の七月四日、北アメリカではイギリス本国からの独立が宣言された。北アメリカで新時代の幕が切って落されたのと、イギリスで「経済学の生誕」が好評をもって迎えられたのとが、同じ年であったことは興味深い。この二つの現象は、現実の社会諸関係と西欧における社会認識の歩み＝社会科学の発達とが、当時、ともに新しい段階にさしかかっていたことをよく示しているのである。

アダム・スミスはよく「経済学の父」と言われる。経済学を一つの独立した学問として確立したという意味であろう。これは、今年（一九八五年）生誕三百年を迎えるJ・S・バッハが「西洋音楽の父」と呼ばれるのとよく

似ている。もちろん、スミス以前にも経済についての論考はおびただしく存在したし、バッハ以前でも音楽は人類の財産であった。しかし、スミスは、その先達フランソワ・ケネー（一六九四―一七七四）とともに、はじめて経済学を体系化した巨人という意味で、経済学の父＝創設者と呼ばれるにふさわしく、バッハも、今日私どもが親しんでいる西洋音楽の殆んどがバッハから始まっているという意味で父の名に価しよう。バッハは、また、「西洋音楽の海」とたたえられることもある。クラシックはもとよりバロックからジャズまで、様々な種類の音楽にバッハは今も生きているという意味であろう。スミスも、バッハへのこの賛辞にならって、経済学の海[2]とたたえられることがある。スミス以後現代にいたるまで、経済学の扱ってきている諸問題には、『国富論』のどこかにその萌芽ないし考え方の基本的方向の見出せるものが多いのである。

本誌『成城大学経済研究』の新企画「人と学説―学生のための社会科学入門」の第一回にアダム・スミスが取上げられたのは、スミスの占めているこうした位置、すなわち、歴史の大きな曲り角の現場証人兼政策提唱者と、二百年をこえてなお生き続けている「経済を見る目」の創設者という二重の役割によるものであろう。この小論では、スミスの生涯とその時代的背景にも若干目を配りながら、しかし、主に『国富論』を取上げて、その素朴だが輪郭のはっきりした経済社会像をのぞいてみることにしたい。

二、生涯[3]

アダム・スミスは一七二三年にスコットランドの東海岸フォースの入江に臨むカーコーディの町に生れた。正確な誕生日は不明だが、六月五日に洗礼を受けている。多分、その日か前日に生れたのであろう。フォースの入江

は東西に長く、カーコーディはその北岸にあり、対岸には、スコットランドの文化と行政の中心エディンバラ市がある。父も同名で、アダム・スミス。カーコーディ地区関税監督官であったが、息子のアダムの生れる五ケ月前頃に亡くなった。母マーガレットはカーコーディの北十数キロにあるストラセンリ城の城主ジョン・ダグラス[4]の妹で父スミスの後添えとなり、一七八四年に九〇才の天寿を全うするまで、独身の一人息子アダムと長く生活を共にした。スミス（以後息子のアダムをこう記す）には異母兄ヒューがあり（四〇才位で死亡）、この子供二人の教育に差支えない程度の財産を父は残してくれていた。スミスは晩年にスコットランドの関税委員に任ぜられ、年額五百ポンド、塩税委員として年額百ポンド合計六百ポンドの手当を受取っていたから[5]、自由貿易主義者スミスとその父とは、ともに税関の仕事で高収入を得るという皮肉なめぐりあわせになっている（グラスゴー大学教授の時のスミスの年収は教授の固定給四四ポンドで、聴講料その他の雑収入を加えて、最低百五十ポンド最高三百ポンド位を得ていたと推定されている。当時の男の召使いの給料が年三ないし四ポンドであったから大学教授は大変な高給取りだが、関税委員はさらに別格の高さであった。スミスは更に、年三百ポンドの年金を後述するバックルー公爵家から受けていたから、年収は合計九百ポンド。おそらくスコットランドではトップクラスの給料取りであったろう[6]）。スミス家にはこのほか、前述の伯父ジョン・ダグラスの娘、つまりスミスの従姉ジェイン・ダグラス嬢が同居していて、家事をとりしきっていた。ダグラス嬢の亡くなったのはスミスの亡くなる二年前だから、スミスは、その六七年の生涯の殆んどを、母と従姉と三人で静かに暮したことになる。

こうした落着いた生涯の学者の伝記は書きにくい。これまでに出されている数冊の伝記には、エピソードもあまりない。しかも作者の苦しまぎれか、ひと頃はこの数少いエピソードが誇張される傾向さえあって、うっかり

信用すると、全く世事にうとい放心癖の奇人などとされかねない程であった。しかしスミスの実像は、教育熱心で大学行政にも有能な、したがって少々うるさ型の、政治的にはどちらかと言えば保守的傾向の大学教授であり、しかも、結構しっかりと生活設計も出来る少し不器用な常識人というところのようである。

スミスはあまり体格のよくない病気がちの子供で、友達と活潑に跳び回って遊ぶことは出来なかったらしいが、おとなしい子で誰にでも親切で皆から好かれていたらしい。母一人子一人で、甘やかしすぎるからひ弱なのだ、と母親はよく身内から非難されたらしい。しかし、それだけに一層この母子の信頼関係は濃くなり、スミスにとって母は生涯の支えだった。生れて最初のスミスの危機は三才のときにおこった。伯父の城のそばで遊んでいて誘拐されたのである。ジプシー女にさらわれたとも、ジプシーより下層のティンカーにさらわれたとも言われるが、金より、着衣を奪うのが目的だったろうとされているから、名門の子らしく良い服装をしていたのであろう。もし救出が遅かったら、「経済学の父」は「ジプシーの智恵袋」になっていたかもしれない。本の好きな、抜群に記憶の良い子だったが、独りごとと放心癖がカーコーディの町立学校――英語学校(前期二年）と古典文法学校（後期四年）の六年制で普通十二才か十三才で卒業した[7]――に通っている頃からあり、これは生涯続いたらしい。例えば、晩年に関税委員として仕事をしていた頃、突然放心の発作がおこって、公文書に署名するのに、スミスは、自分の名を書かず、前の委員の署名をそっくり真似して書いてしまったことがあるという。またあるとき、関税局の門番が、入ってくるスミスに捧げ銃風の挨拶をすると、スミスは門番に向って、手にしたステッキで全く同じ動作を行い、面喰った門番が部屋まで先導すべく歩調をとって進むと、スミスは門番と同じ姿勢・同じ歩調で後に続き、到着して門番がおじぎをすると、スミスもその動作をそっくり真似して門番に厳粛におじ

ぎを返したという。このエピソードを伝える伝記作者のレーは、こうした現象を、長期間深く集中する思索力が時にもたらす放心、「思索家の痙攣」[8]と名づけている。

町立学校を卒業したスミスは十四才（一七三七年）で同じスコットランドのグラスゴー大学に入学する。現在の大学生の年令と比べると天才児の特別入学のようだが、当時は十一・二才で入学するのが普通で、スミスは体が弱くておくれたらしい。在学中スミスは数学と自然哲学（＝物理学、天文学、など）を好み、当時グラスゴー大学教授でユークリッド幾何学の英訳者としても著名な天才数学者シムスン博士を尊敬していた。また、スミスと同じ頃シムスンに学び、のちにエディンバラ大学数学教授に就任したマシュー・ステュアート博士をシムスンと並ぶ最大の数学家と絶賛している。その息子がスミスの最初の伝記を発表したエディンバラ大学教授（数学、天文学、道徳哲学を順次担当したのち一八〇〇年よりヨーロッパではじめて経済学講義を担当）デューゴルド・ステュアート[9]である。経済学史上著名な人には、医者（ペティー、ロック、マンドヴィル、ケネーなど）と学生時代に数学の成績の良かった人（マルサス、ケインズなど）が多い。スミスもその例にもれなかったことになる。但し、『国富論』に数式は出てこない。スミスの尊敬した先生の中には、また、道徳哲学教授のハチスン博士がいる。「最大多数の最大幸福」という句は、イギリスの功利主義の最初の体系的組織者J・ベンサムがJ・プリーストリーの『政府第一原理論』（一七六八年）の中で発見し、これにより自らの主義を確立した句として有名であるが、実は、その本より以前に、このハチスン教授が作ったものであった。[10] スミスは晩年に母校グラスゴー大学の総長に選出（教員および学生全員の投票による）されるが、その就任を受諾する手紙の中に、「けっして忘れえぬハチスン博士」と記して、ハチスンの学恩に感謝している。ハチスンはアイルランド出身の思想家で、当時大学では主にラテン語

で講義が行なわれていたのに逆らって、英語で講義をした。ラテン語では理解出来ぬ学生も多かったらしいが、英語なら、学生ははるかに理解しやすかったろう。道徳哲学（現在の社会科学と倫理学）を、現実に自分たちの生きている社会、すなわち当時形成されつつあった市民社会を研究する学問として築きあげてゆくには、他国の死んだ言葉＝ラテン語ではなく、自分たちの使っている生きた言葉＝英語で考え、語ることが何より必要だとハチスンは考えたにちがいない。このような意味で、普通、ハチスンの英語による講義は非常に進歩的な試みとして高く評価されている。彼のこの大胆な試みがスコットランドにおける社会科学の発達に大きな貢献をしたことは疑いない。

ところで、スミスは子供の頃、一体何語で生活していたのだろう。英語を話していたにきまっている、と誰しも考えるかもしれないが、スコットランドでは事態はそれ程単純ではなかった。

スコットランドがイングランドと合併したのは一七〇七年、スミスの生れる僅か十六年前である。既にその百年程前の一六〇三年にスコットランド国王ジェイムズ六世がエリザベス女王（一世）の後を継ぎジェイムズ一世としてイングランドの国王になってはいたが、彼は二つの国の国王を兼ねていたのであって、合併までは両国は別の国であった。古く五世紀末頃から、西隣のアイルランド島北東部のアイルランド人（彼らがスコッツと呼ばれ、そこからスコットランドという地名が生れた）が、現在のスコットランドの南西部にも移り住んでいて、彼らの言語ゲール語を持ち込んでいた。十一世紀頃まで、エディンバラとグラスゴーを結ぶ線から南側イングランドと境を接するあたりまでには、ゲール語が広まっていたらしい。他方、アングロ人は六世紀頃からスコットランド南東部にも移住してきて、十二世紀頃には、彼らの言語つまりかなり独得な英語の亜種（スコットランド語）がスコット

ランド全域に広まった。[11] こうした事情のため、一七五〇年頃でも「エディンバラにおいては、現代語とはいえ、英語は一般人にとって外国語の一種」[12]だったのであり、一七六〇年代にもなお、「スコットランドにおける英語読書および会話促進計画」[13]のための基金募集が行なわれていた。「スコットランドでは知識人でさえ、読書はともあれ、英語を話したり書いたりすることがほとんど出来なかった時代」[14]だったのである。現在の日本人の知識人よりいくらかましな程度でもあろうか。

スミスが子供の頃通った町立学校の前期二年が「英語学校」であったとさきに記した。日常的にはかなり「方言」的な「スコットランド語」で生活し、学校で「標準英語」を習ったのである。ハチスンやスミスの英語による講義には、従って、一種の「言語侵略」の臭いがする。日本が植民地にしていた頃の朝鮮の学校で——小学校から京城帝国大学まで——日本語のみで授業が行なわれていたのと比べれば、罪ははるかに軽かろうが、スコットランドの古い伝統を見失わせイングランドと一体化する上に一役買ったことは否めまい。一八七一年にインバネス・ゲール協会が組織されて、ケルトの詩、伝統、伝説、書籍、手稿などの再発掘がはじめられ、一八八七年にはグラスゴー・ゲール協会が発足してケルトの古代遺物の解明が試みられたのは、十八世紀以来のスコットランドのイングランド化傾向に対する反省、換言すればスコットランドの伝統文化再認識の動きである。ナショナリズムと言ってもよい。これとアイルランドの同様な運動との関係などは非常に興味のある問題だが、ここでは触れるわけにはゆかない。差当りは、日本でラジオとテレビの洪水が、一面では全国的に「文化」と「生活」の向上を促しながら、反面、その画一化、「中央集権化」、各地方の伝統の破壊をもたらしたことを想起していただければ十分である。

アダム・スミス（一）

スミスの生涯に話をもどそう。グラスゴー大学に三年在学し、修士号を取得したスミスは、スネル基金の奨学生に選出され、一七四〇年にオックスフォード大学ベイリオル・カレジに入学する。このスネル奨学金というのは、日本の現在の育英会奨学金などとは大違いで、十一年間給付（貸与ではない）、年額四〇ポンド。後年グラスゴー大学教授としてスミスが受取っていた固定給が年収四四ポンドであったことを思いおこせば、日本流に言って学部の学生（スミス十七才）の奨学金としてはかなり高額に思える。これは、グラスゴー大学の最優等生に賞としてあたえられた。スミスのときは他にも一人与えられた。[15] 当時労働者の日給は日雇労働者六ないし八ペンスであったというから、四〇ポンドというのは、日雇労働者の一六〇〇日分または一二〇〇日分に相当する。相当な大金だが、カレジに食費として年三〇ポンド支払わねばならなかったし、オックスフォードの自費生で年六〇ポンド以下でやってゆける学生は当時殆んどいなかったというから、スミスの学生生活はかなりつましいものだったろう。入学二年後の一七四二年に別の奨学金年額八ポンド五シリングを得たが、これは主に賄料の補助金に回したという。

スミスは一七四四年に学士号を取得し、引続きオックスフォード大学に留まるが、合計六年間の滞在ののち一七四六年八月に、ベイリオル・カレジを去り、出身地カーコーディに帰り、その後二度とオックスフォード大学を訪れることはなかった。二年半後の一七四九年にはスネル奨学金も辞退している。本来この奨学金には聖職者になることが条件としてつけられていたが、当時はかなり条件が緩和されており、スミスは聖職者になる意志を失っていたらしい。いわばもらい得をしたわけだ。オックスフォード大学、特にベイリオル・カレジにはスミスは失望したらしい。グラスゴー大学では、ハチスンは毎日早朝から講義していたが、オックスフォードでは週二

回講義があるだけであったし、それも、「教えるふりをすることさえやめてしまう」ほどのものだった。個人指導教師はきわめて投げやりで、脈絡のないことを断片的に話すだけで満足している様子であった。しかも、同郷の先輩である哲学者D・ヒュームの名著『人性論』（一七三九―四〇年）を読んでいるところを発見され、無神論者の悪書を読む不心得学生として厳重な譴責処分を受け、書物を没収された（後にこのヒュームとは生涯の友となる）。近代合理主義思想は、グラスゴー大学でこそ学生の学ぶべき最新の成果であったが、オックスフォードでは禁断の木の実であった。スミスが譴責処分で済んだのは運の良い方で、その数年前には、同じような理由で学生が三人放校処分に付されたほどであった。講義担当者や個人指導教師が怠慢だったのは、スミスのような勉強一筋の学生にはかえって幸いで、彼は猛烈な集中力で読書にふけった。数学はやめにしたらしく、この頃は専らギリシャ・ラテンの古典を読み、古典文法に精通し、文学をきわめ、イタリアの詩を読み、フランス古典の文体研究にも熱中した。英語の文章力を身につけるために、フランス語の作品の翻訳を徹底的に行なったとも伝えられている。英語会話、特に正確な発音を身につけたのもオックスフォードでの精進の成果で、なまりの強い他のスコットランド出身学生とは全く違う純粋な正しい英語を、何の苦もなく日常の会話で駆使して、イングランド人をおどろかせたという。このような生活には、図書館の完備しているオックスフォードは大変便利で、その意味では、スミスはこの大学ですごしたことを感謝しているが、堕落した大学に対する軽蔑心も終生持ち続け、『国富論』の中では非常に辛らつに批判している。私どもにも耳の痛い文章が多いが、二・三紹介してみたい。

「（教師だけが教師を監督する場合は）、かれらは共同戦線を張って、あいみ互いにすこぶる寛大であろうとし、だれもが、自分の義務をなおざりにしてもとがめられないという条件のもとに、仲間がなおざりにしても、そ

れを黙過しているらしい。オックスフォードの大学では、正教授の大半は、ここ多年にわたり、教えるふりをすることさえ、すっかりやめてしまっている[16]」。

教育臨調の大学教員任期制限案はこれを読んだせいだろうか。

「もし各カレジで個人指導教師、つまり個々の学生にすべての人文諸学や科学を指導することになっている教師を、その学生のほうでだれにつくかを自由に選ぶのでなく、カレジの長のほうから割り当ててくることになっており、また、もしその個人指導教師に怠慢、無能あるいは不適当な取扱いがあったときにも、学生はその教師から他の教師に代ってつくのを……許されないことになっているとすれば、こういう規則は、同じカレジの中のそれぞれの教師間のいっさいの競争を絶滅する傾向がおそろしく強いだけでなく、教師全員にわたって、勉励する必要と各自受持の生徒に気を配る必要とをおおいに減ずる傾向があろう[17]」。

成城では、幸い、ゼミと外書は学生が選択する。しかし、原則として変更は出来ない。語学や体育はどうなるだろう。成城の教師はスミスにほめられるだろうか、叱られるだろうか。

「教師は、生徒に教えようと思っている学問を、自分でかれらに説明してやる代りに、なにかそれにかんする本を読んでもいい。そして、もしその本が外国の死語で書かれているなら、生徒にたいして、自国語に訳してやることによって、あるいはもっと楽なやり方だが、生徒に、自分の前で訳をさせ、ときどき思いつきをいうことによって、おれは講義をやっているんだというつもりになることもできる。これならば、ほんのわずかな知識と勉強でもって、軽蔑にも嘲弄にもさらされることなく、あるいは、まったく馬鹿げた、理にあわぬ、または、とんでもないようなことは少しも言わずに講義することができよう[18]」。

これでは、おそろしくて、スミスに、「私は外書講読を担当しています」などと言えなくなる。スミスのような学生を相手にした先生は辛かったろう。

「カレジや大学の校規は、総じて、学生の便益のためにではなしに、教師の利益のため、もっと端的に言ってしまえば、教師の安逸のためになるようにできている。その目的は、どんな場合にも教師の権威を維持し、そして教師がその義務を怠ろうがやり遂げようが、学生の側はどんな場合にも、教師があたかもその義務を最大の勉励と能力でもってやってのけたかのように、教師にたいしてふるまうことを強いることにある。校規は、教師という階層は完璧な知と徳をもっているのに、学生という階層は最低に欠陥だらけで愚かだという前提に立っているかのようだ。」[19]

譴責処分を受けたスミスとしては、処分不当を『国富論』でも訴えたかったのかもしれないが、そのような勘ぐりは別にして、この問題提起は、かつての大学紛争で大きく問題にされたところであった。現在までのところ、未だ基本的には解決されていないと言えるのではなかろうか。

「教師がほんとうにその義務を果している場合には、学生の大半が、いやしくもかれらの義務を怠るなどという例はない、と私は信じている。真に出席するに値する講義ならば、そういう講義の行なわれているところではどこでもよく知られているとおり、出席を強制する校規などおよそ必要がない。」[20]

私が教師の義務をほんとうに果しているなどとは決して言えないが、それでも、スミスのこの文言は今の大学生にはあてはまらぬのではないか、と少々弁解もしたくなる。こういう文言には、やはり、年額六〇ポンドなどという大金（四百万円位か）を負担できるごく一部のエリート学生を対象に考えている二百年前の老人の姿が見え

るように思われる。大学の社会的役割が全くちがうと言えばそれまでだが。

「もっとも、強制と拘束も、児童、あるいは少年といってもごく小さい者たちを、教育のうちで、一生のそういう早い時期のあいだに身につけることが、かれらのために必要だと考えられる課程に強いて出席させるためになら、ある程度必要なことは疑いなかろう。[21]」

今の大学生には、ここに言う児童、少年と同じく、まず、どうしても必要なことを強制的にでも身につけさせねばならぬと考えてよいのではないか、出席をとることも必要だ、と少しく安心すると、次のように逆襲される。

「十二、三才をすぎれば、教師がその義務を果している限り、強制とか拘束とかは、教育のどの段階を行なってゆくにも、その必要はまずありえない。若い者の大部分は、とても寛大なもので、教師の指導を無視したり、軽蔑したりする気になるどころか、教師の側でかれらの役にたとうという、まじめな意図を示しさえすれば、教師がその義務を果すうえで、いろいろまちがいがあっても大目に見るし、時には、えらく怠慢なことをしても、世間には知られないように、かばおうとさえする気になるのが普通なのである。[22]」

十二・三才が当時の大学入学年令であったことは前に記した。当然、現在の大学の教科内容に比べれば一般的入門的な部分が多くなっていたであろうが、それにしても、十二、三才は一人前の大人として扱われ、扱われる側も一人前の心得のある人間として行動した。スミスは良い学生に恵まれていたな、と羨ましがる前に、私どもは、スミスほどの講義等への熱意と学生への信頼を持って事にあたっているか、と自らに問うべきなのであろう。二百年たっても朽ちることなく、常に新鮮だと驚嘆される『国富論』の魅力は、このような、スミスの心の声がいたるところで聞かれることから生れているのである。

ところで、オックスフォードでの不満を、のちに、このような見事な大学論として結晶させ、それも、自由競争の原理の作用できる自然の状態に大学をおくことから生ずる自らなる調和、というスミスの根本思想で一貫してまとめあげていることは右の引用から読みとれると思うが、図書館にこもりきったあげくスミスはどうなったであろうか。勉強のしすぎ、本の読みすぎで壊血病と頭のふるえに悩まされるようになり、倦怠感に襲われて何事にも気がすすまない程になってしまった。ヒュームも四・五年続けて本を読みすぎて同じような症状に悩まされたという。すさまじいまでの集中力であり智識欲である。こうした大学のあり方への不満と肉体的不快感に加えて、スコットランド出身の学生スミスは、当時の政治問題すなわちジャコバイトの反乱（一七四五―四六年）で、微妙な立場に立たされることになった。名誉革命で追放されたジェイムズ二世の孫チャールズ・エドワードはスコットランドの支持者を率いて、イングランドに王位奪回の戦いを挑み、オックスフォードのイギリス人学生たちも多くが反政府すなわちエドワード支持の立場に立った。デモや暴行事件が学内外でおこり、大学当局は取締る能力を失い、「暴力学生」は英雄視されるという、日本でつい十数年前に見られたと同じ状態が学園都市におこった。スミスは反ジャコバイト、すなわち現政府支持であったから、出身地側の勢力を裏切る立場になり、しかも、現政府側が勝ったため、保守反動学生の仲間ということになってしまったらしい。学業を中断して郷里に帰ったのもわかるような気がする。のちに『国富論』などで名声を得ても、通常ならば贈られる筈の博士号をオックスフォード大学はスミスに対して贈らなかった。ベイリオル・カレジはスミスの出身校として世界に名高く、カレジ自身も今はそれを誇りにしているが、生前の関係はむしろ冷やかなものであったと言えよう。

カーコーディに帰ったスミスは、その後二年ほど母と共に暮し、『天文学史』などを執筆した。またジャコバ

イトの桂冠詩人と言われたハミルトンの詩集を編集し、序文をつけて匿名で出版したとされているが、これには、根拠なき伝説という反対意見もある。[23] この間、おそらく大学の教師の口を探したり貴族の家庭教師の口を探したりしたらしいが、うまくゆかなかった。大学をおえて（中退?）から、二年間職がなかったことになる。当時、貴族の子弟は、海外に遊学する際、家庭教師を伴って行った。これは、大学の教師の職に場合によっては劣らぬ程の良い就職口であった。スミスも、フランスでの勉強を希望するという意味もあって、熱心にこの職を探したらしい。ところが、就職運動で対岸のエディンバラを訪れているうちに、その地の文化運動の指導者ともいうべきヘンリー・ホーム（のちのケイムズ卿）[24] と知り合い、その世話で、エディンバラ市で公開講義を行なうことになった。一七四八年冬から翌年春までの数ヶ月。大好評のためか、四九年冬～春、五〇年冬～春と三年連続して公開講義が行なわれた。この公開講義で毎年スミスは百ポンド以上の収入を稼いだという。聴講料は一人一ギニーであったというから聴講生は毎年百人位いたことになる。大学教師の肩書きもない二六～二七才の青年の仕事としては当時でも破格のものであった。この時スミスは、「修辞学・文芸学」、さらにはその発展としての「論理学」「道徳哲学」まで講義を行なっていたらしい。さきにも述べたように、この時代、まだ知識人すら英語力は十分でなかった。スミスはオックスフォード以来の文体研究、文学研究を生かして、英語による思想表現方法、さらに英文学研究を講じ、修辞学から論理学へ、そして哲学へと講義をすすめていったようである。こうした内容から、スミスは「スコットランドにおける現代修辞学の創始者であったばかりでなく、イギリス全土における現代英文学の学問的研究の偉大な先駆者」[25] とさえ評価されている。

スミスのこの公開講義の内容は、一九六三年に出版された『修辞学・文学講義』[26] で十分推測できる。これはグ

ラスゴー大学で一七六二年一一月一九日の第二回講義から一七六三年二月一八日の第三〇回講義まで大体二日ないし三日毎に行なった「道徳哲学講義」について、学生が克明にとった「ノート」であるが、スミス自身の著書に準ずるものと認められている。実はこれが、一七四八年から五一年にかけての公開講義の内容とほぼ同じと確認されている。何故この大学での「道徳哲学講義」がエディンバラでの修辞学や文学の講義と同じなのか、表題だけで見ると大変異なる学問のようであるが、実は、文体論や文学論そのものを別にすれば、両者ともに、現在広い意味で社会科学と呼ばれるものの中に含まれる内容なのである。

スミスの公開講義が好評だったことも手伝って、一七五一年二八才のとき、スミスは母校グラスゴー大学の論理学教授に任命される。就任講演は「観念の起源」と題しラテン語で行なわれたという。たまたま道徳哲学の教授が病気のため、道徳哲学も開講し、五二年からは道徳哲学教授になる。尊敬するハチスン先生の二代あとの道徳哲学教授である。この後一七六四年に四一才で大学を辞職するまで、スミスは大学で大活躍をする。ほぼ毎日早朝から道徳哲学の講義、昼には、学生が講義を理解しているかどうかのテスト、週何回かは他の課目の講義。もちろん大学は昔も今も会議ばかり。スミスは五八年に大学の出納官になり、六〇年には三七才で人文学部長、六二年に三九才で副学長、つまり講義のほかにこの三つの役職をかね、大学の予算から、下水道の排水の具合まで見て回らねばならなかった。五九年には講義の一部が『道徳情操論』[27]として出版され好評を博し、これによりヨーロッパ各地はもとより遠くロシアからも留学生がスミスの許に集まるようになった。[28]このほか自宅には学生を数名寄宿させて面倒を見ていた。「これでは研究なんかできた筈がない」とイギリスのスミス研究者は言う。だからさきに紹介した学生のノート『修辞学・文学講義』の内容は、エディンバラでの公開講義と同じだったろ

う、と若干皮肉な推測もされるのである。[29] この頃のスミスの講義は他にも学生のノートの形で二種類発見され『グラスゴー大学講義』[30]（一八九六年）などとして刊行されている。

さらにスミスは友人たちと雑誌『エディンバラ評論』を創刊し、その第一号（一七五五年）に匿名で、S・ジョンソン博士の有名な『英語辞典』（一七五五年）を書評し、また第二号（一七五六年）にも匿名で長篇の「編集長への手紙」を寄稿し、全ヨーロッパの学問の最近の成果を紹介し批評した。特に、フランスの百科全書派の業績とルソー『人間不平等起源論』（一七五五年）を高く評価している。この雑誌は残念なことに二号で廃刊になったが、当時のスミスの広汎かつ透徹した読書の状況を知る上でも数少い貴重な文献である。なお、一七六二年にグラスゴー大学から法学博士号を授与されている。

一七五九年に刊行されたのが『道徳情操論』と題されていては、いつになっても経済学者アダム・スミスの顔が見えない、と、もどかしがるかもしれぬ諸君のために、スミスの担当した道徳哲学の講義の構成を記しておこう。全体は四部門に区分され、第一部門は自然神学、第二部門は倫理学、そして、第三部門は正義の原理、第四部門は便宜の原理にそれぞれ基く考察が行なわれたと伝えられている。このうち第二部の倫理学が『道徳情操論』として発表され、第四部の便宜の原理に基く諸考察が『国富論』に結晶したのである。スミスは、さらに、第三部の正義の原理に基く考察を広く法の世界の考察にまでまとめ上げる予定であったが果せなかった。人間の生命には限りがある。

『道徳情操論』はスミスに意外な幸運をもたらした。政治家として著名なチャールズ・タウンゼンド（最後はイギリスの大蔵大臣になり、茶、ガラス、塗料などのアメリカ植民地への輸入に対する課税つまり悪名高いタウンゼンド法の

新設を準備した。いわばボストン茶会事件の生みの親）がこの本に感銘をうけて、再婚により自分の義理の息子となった少年貴族バックルー公爵の家庭教師になるようスミスに依頼をしてきたのである。当時、貴族の子弟は教育の仕上げに海外遊学をする習慣があり、その付添い家庭教師になる大学教授も少くはなかった。スミスは後に『国富論』で、この習慣は当の青少年にあまり良い影響を与えない、と批判しているが、このときは引受けた。若い頃からの希望でもあり、また、報酬が非常に高く大学教授より良いことも引受けた理由であろうが、さらに、さきに書いた猛烈な忙しさから逃れたいという気持も働いたのではないかと推測される。

タウンゼンドは一七五九年の夏、すなわち『道徳情操論』の出版された数ケ月後にグラスゴーに行き、スミスと会っている。この折、製革工場の見学に行った。スミスは作業工程の説明に夢中になり、革鞣し用の薬液の入った大きな桶の中に落ち、あやうくおぼれるところだったという話が残っている。製造工程の「分業」の説明に熱中しすぎたからだ、という落ちまでついているが、いくら『国富論』中の分業の説明が有名だとは言っても、これは少々眉つばだ。ただ、この当時イートン校に通っていた少年公爵の旅行随行家庭教師になることを引受けたのはこの頃らしい。フランスに旅立ち、大学に辞表を出したのは、一七六四年二月だから、四年以上も前から少しずつ準備していたのであろう。また、七年戦争（一七五六年～六三年）が終るまではフランスを訪れにくい、という事情もあったかもしれない。

辞職に際して、スミスは受講生に、学期途中でやめることを詫び、残りの期間の受講料を日割り計算で算定した分をあらかじめ紙に包んでおき、学生に返した。学生たちは、「自分たちは既に十二分に教えを受けているのでとても受取れない」、と頑張ったが、スミスは学生のポケットに無理やりネジこんで教室を去っていったとい

う。バックルー公爵家からの報酬は当時としても破格のもので、年俸五百ポンド、旅行が終ってからは終身年金三百ポンドであった。前に記した大学での収入合計より多い。

グラスゴー大学でのスミスの生活はこれで終るわけだが、なお二つ、注目すべきことがこの時期にあった。その第一は、当時のグラスゴー市が、アメリカ植民地に最も近い港町として、アメリカとの貿易特にアメリカ産タバコの輸入とヨーロッパ各地への再輸出で、日ましに栄えてゆく新興工業都市であったことである。スミスは町の有力実業家たちとの交流も多かったらしい。ここには世界最初の「経済学クラブ」がありスミスも入会した。こうして彼は新しい時代の経済にも詳しくなった。第二に、後に蒸気機関の大改良でイギリスの工業に大革命をもたらしたジェイムズ・ワットをグラスゴー大学の実験用器機修理人として雇い入れ、実験その他の仕事を与えた。ワットは、グラスゴー市で徒弟修業をしたのではなかったため、市内で開業することが出来なかった。これは、同業者の数を少く抑えて地域の独占をはかるという同業組合のマイナスの作用の典型的な例である。ただ、大学内にはその規制は及ばない。ワットが大学内に仕事場を得られたのはそのためであった。スミスもワットも互いに、相手から多くを学んだらしい。『国富論』の中には、同業組合が長い年期奉公を強制し開業を制限して、自由な営業活動を妨害している状態を厳しく批判する部分がある。

フランスに遊学したスミスは、当時たまたま外交官としてフランスにいた親友ヒュームの紹介もあって、パリ、ベルサイユ、トゥールーズ、と各地を回り、歓迎され、社交界にも顔を出し、さらにジュネーブに行き尊敬するヴォルテールに会うなど実り多い二年半をすごした。当時のフランスでは最新の経済学たる重農主義が盛んであったが、その総師たる老外科医ケネーおよびその他の知識人とも親しく交わった。これもスミスの経済学研

究に大きく役立ったと考えられる。もっとも、若干お国自慢気分で、スミスはフランスに行く前にすでに『国富論』を書き始めていた、と主張するイギリスの学者もひと頃はいた。フランスの貴婦人で、スミスに大変ご執心だった人もいたらしいが、その頃スミスは別のご婦人に熱中していたため、どちらもうまくゆかなかったらしい。スミスが何故独身であったか、本当のところはわからない。ただ、私が大学生のころ受けた講義では、「スミスは研究に忙しくて結婚する暇がなかった」と教えられた。そうお話しになる教授が結婚しているのは何故だろう、と悪友たちと笑いころげたことがある。スミスには、ずっと前の、まだエディンバラで公開講義をしていた頃にも親しくしていた素晴しい美人がいたらしく、周囲でも当然その人と結婚すると思っていたらしい。しかし、後年、その女性と再会した時には、全然思い出さず、従姉のダグラス嬢に注意されてやっとわかったという。これでは結婚できそうにない。しかし、この女性も終生独身であったという。このようなことまで調べられるのだから、有名人とは気の毒なものだ。

一七六六年十一月、スミスはフランスから帰り、しばらくロンドンにいた後、郷里のカーコーディにもどり、以後『国富論』の執筆に専念する。途中で、王立学会員に推薦され、エディンバラ市名誉市民に推されるなどのことがあったが、『国富論』がほぼ完成したのは一七七三年、五〇才のときであった。体が極端に弱り、とても出版までもちそうにないと考えたスミスは、ヒュームを遺言執行人に指名し、後事を託したが、幸い回復して、ついに一七七六年三月九日に出版できた。スミスの代りに出版してやる筈だったヒュームは、既にガンに犯されていて、長く待ちわびたこの『国富論』を一読し、「でかした！すばらしい！スミス君」と手紙を送ったが、この書物について語りあえる体力を回復できぬまま八月に亡くなった。スミスにとっても、これは大変な悲劇であ

った。当時、『国富論』の内容を正しく理解できるのは、イギリスではおそらくヒューム唯一人だったのである。良き理解者を欠いたこの本は、以後長く、名声のみ高く、理解されることの甚だ少い書物となってしまった。

この後のスミスは、『道徳情操論』の改訂（第六版まで）と『国富論』の改訂（第五版まで）、さらにスコットランド関税委員（一七七八年）、グラスゴー大学総長（一七八七年）、翌年再選と、健康にこそ必ずしも恵まれなかったが、豊かな暮しを続け、一七九〇年七月一七日に亡くなった。亡くなる数日前スミスは親しい友人たちに草稿類を焼却させ、ごく一部分だけを残した。これが一七九五年に『哲学論文集』として刊行された。[31] この、大量の文書類の焼却が、スミス研究の手掛りを失わせてしまい、後のスミス研究にとって大きな障害になっている。お墓はエディンバラ市のキャノンゲイト教会の墓地にあり、墓地の中で、スミスの墓だけが柵で囲われ、古い墓石と新しい墓石の二つがおかれ、どちらにも、『道徳情操論』および『国富論』の著者と刻まれている。

スミスの葬儀は、その名声の割に参会者が少かったと伝えられる。亡くなる時期が悪かったとも言われる。当時はフランス革命の影響がイギリスに及び、当局側は、自由主義的傾向に対しては極端な警戒心を抱いていた。スミスですら、その立場が革命賛成者側と見られかねなかったのである。[32] 実はそうではなかったことは、次節で明らかにするが、名声の割に淋しい葬儀だったというのには、こうした政治的事情も反映しているのであろう。スミスがかなりの高額所得者であったことは前に記した。しかし、遺産はその割ではなかった。その理由は、長年にわたって慈善活動に匿名で寄附をしたためと言われる。彼の人柄のしのばれる行為である。

以上大急ぎで、スミスの生涯を通観した。では彼の仕事はどのような内容のものか、次節以下でそれを簡単に探ってみよう。

(1) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 2vols., London, 1776. 訳書は数種類ある。本稿では大河内一男監訳『国富論』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、中公文庫、一九七八年を一部改めて引用した。その他の訳書については本論文の末尾を参照されたい。

(2) 高島善哉『アダム・スミス』岩波新書、一九六八年、一四ページ。

(3) アダム・スミスの生涯を伝える書物はこれまでに数冊出されている。そのうち従来の研究の比較検討を綿密に行なった出色の訳註をもつものは、デューゴルド・ステュアート、福鎌忠恕訳『アダム・スミスの生涯と著作』御茶の水書房、一九八四年である。訳書の原本は *Biographical Memoir of Adam Smith by Dugald Stewart*,〔1793〕, 1858.〔The Adam Smith Library-Reprint of Economic Classics, Kelly, 1966〕である。本節の叙述は主にこの福鎌氏の注解に依拠した。このほか John Rae, *Life of Adam Smith*, 1895, 大内兵衛、大内節子訳『アダム・スミス伝』岩波書店、一九七二年、水田洋『アダム・スミス研究』未来社、一九六八年にも多くを負っている。

(4) 水田、前掲書、九ページ。

(5) 福謙、前掲書、一五二ページ。

(6) William Robert Scott, *Adam Smith as Student and Professor*, 1937,〔The Adam Smith Library-Reprint of Economic Classics, Kelly, 1965〕pp. 67-8. 福謙、前掲書、一三一ページ。なお、スコットによれば、当時は卵一ダースが一ペンス、バター一ポンドが二ペンス半であった。現在日本で卵一ダース三百円程度として計算すると、スミスの固定給は三百万円位、スミスの年収は最低一千万円、最高二千万円位になる。晩年の収入は六千万円位でほかに書物の印税があったから、かなりの高額所得者と言えよう。もちろん、これは一応の目安であって、お遊びに近い試算でしかないが。

(7) 福謙、前掲書、九六ページ。

(8) レー、大内訳、前掲書、四一七ページ。

(9) エディンバラ大学でデューゴルド・スチュワートの教えをうけた学生の中に貧乏な秀才ジェイムズ・ミルがいた。その息子が十九世紀中葉のイギリスで最も尊敬された社会科学者で新古典派経済学の先駆者といわれるJ・S・ミルである。

(10) レー、大内訳、前掲書、一五ページ。

(11) G. Donaldson & R.S. Morpeth, *A Dictionary of Scottish History*, Edinburgh, 1977, p. 81, p. 194.

(12)(13)(14) 福鎌、「(一)アダム・スミスとエディンバラ公開講座―スコットランド道徳哲学者の生誕―」、前掲書所収、二五一ページ。

(15) 福謙、前掲書、九六ページ。

(16)(17)(18)(19)(20)(21)(22) 大河内監訳、前掲書、Ⅲ、一一三～一一九ページ。

(23) 福鎌、前掲書、一一五ページ。

(24) Kames, Henry Home, Lord (1696-1782)、エディンバラの文化的黄金時代とかスコットランドの復興期と呼ばれる十八世紀後半のスコットランドの文化運動の中心的指導者。自身でも『人間的素描』一七七四年のほか歴史や道徳哲学についての著書をあらわしている。この文化運動の立役者がケイムズ卿とヒューム、スミスである。その他多くの輝く星たちをまとめて、かつては、「スコットランド歴史学派」と呼ぶことが多かったが、近年は、むしろ「スコットランド啓蒙」と呼ばれるようになった。なお、今日でも最もすぐれた百科事典として知られるエンサイクロペディア・ブリタニカ（大英百科事典）は、一七七一年にその初版が、エディンバラで、「スコットランドの紳士たち」によって編集、刊行された。現在はアメリカでシカゴ大学が中心になって刊行しているが、その誕生の地と創業者たちを記念して、今も、スコットランドの国花、アザミの紋章が事典に刻印されている。

(25) 福謙、前掲論文、前掲書、二五三ページ。

(26) John M. Lothian (edited with an Introduction and Notes), *Adam Smith's Lectures on Rhetoric and Belles Lettres 1762–1763*, Edinburgh, 1963, ジョン・M・ロージアン編　宇山直亮訳『アダム・スミス　修辞学・文学講義』未来社、一九七二年。

(27) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, Edinburgh, 1759. アダム・スミス、米林富男訳『道徳情操論』上下・未来社、一九六九―七〇年（改版本）。水田洋訳『道徳感情論』筑摩書房、一九七三年。水田訳には初版が用いられ、生前の最終版である第六版までの各版の異同が細部にわたって綿密徹底的に比較対照されており、スミスの生涯にわたる努力があますところなく再現されている。

(28) 帝政ロシアの政府派遣留学生サイモン・デスニッキーとジョン・トレチャコーフは帰国後ロシアにおける社会科学の発達に大きく貢献した。トレチャコーフは四〇才で若死したがすぐれた著書を残し、デスニッキーはモクスワ大学の最初の法学教授となり、ロシア法学の創始者、モスクワ大学の誇りとたたえられている。このほか、帝政ロシアへのスミスの影響などについては、アンドレイ・アニーキン、松川七郎監修・小檜山愛子訳『アダム・スミスの生涯』頸草書房、一九七五年が、若干小説仕立てで面白すぎるところもあるが、従来のスミス研究の盲点をつく叙述もあって有益である。

(29) 水田洋「国富論が問いかけるもの」、高島善哉・水田洋・和田重司・田中正司・星野彰男・伊坂市助共著『アダム・スミスと現代』同文館、一九七七年、五七ページ。

(30) Edwin Cannan (edited with an Introduction and Notes), *Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms, delivered in the University of Glasgow by Adam Smith, reported by a student in 1763*, Oxford 1896, 高島善哉・水田洋訳『アダム・スミス、グラスゴウ大学講義』日本評論社、一九四七年。

Lectures on Jurisprudence: Report of 1762-3, これは、さきに記したロージアン教授の発見で、現在では、後述するグラスゴー版のスミス全集におさめられている。

(31) *Essays on Philosophical Subjects*, by the late Adam Smith, Edinburgh, 1795. これも、現在は、グラスゴー版全集におさめられている。

(32) 「スミス博士、あなたは労働がいっさいの富の原因だとおっしゃるが、これはおそろしく煽動的なことばじゃありませんか？ ジャコバン党員たちのあいだでは、あなたはその仲間の一人、いやもっとひどいのになると、サンキュロットだとうわさされています。後代の人々は、おそらくあなたをマルクス主義者、それどころかボルシェヴィキだと思うでしょう」。一九二六年に出されたイギリスの小説の中で、一八〇〇年代初頭を舞台にスミスの亡霊と後代の人びととの間で交される幻想的な対話の一節。アニーキン、前掲書、二六ページから引用。